

期末評価	
○ 成果と▽ 課題	● ▼ 次年度への方策等
【第1学年】 ＜国語＞ ○11月から日記の宿題を開始したことにより、書き慣れている平仮名だけでなく、カタカナと漢字を書く意識が高まってきている。また、文章の構成に慣れ始め、自分なりの言葉で表現することに挑戦するようになってきている。 ▽発表、対話、グループ活動を取り入れていくなかで、話すことに対して抵抗感が軽減されてきて、理由なども付け加えて話せるようになってきたが、聞き手の反応があまりない。 ＜算数＞ ○加法・減法は宿題やドリルパーク、計算ドリルなどを活用して何度も繰り返し取り組むことで、確実に定着するようになった。 ▽時計が何時半までは読めるが、何時何分まで正確に読むことが難しいことがある。 【第2学年】 ＜国語＞ ○日記で既習の漢字を使う習慣がついてきた。 ○文章を書く際の主述のねじれについては、1文を短く書くことを指導したことで、読みやすい文章が書けるようになってきた。 ▽拗音・促音については、日記や授業中に個別に指導してきたが、書き急いでしまうためか、正しく書くことについてまだ十分に身に付いていない。 ＜算数＞ ○長さについては量感がついてきている。 ○一つ分といくつ分の数の理解が定着し、文意を捉えて解答することができるようになった。 ▽生活経験や語彙力がたりないためか、算数用語のはば、長さ、厚さのなどの違いを理解して、問題を解くことができない。また、問題の意図を正しく読み取ることができない。	●カタカナや漢字がうろ覚えになっているので、宿題や漢字テストなどを活用して、使用頻度を増やして習得につなげていく。 ▼他者が話をしているときは、静かに聞くことができるが、返答や質問ができる子が少なく、考えて聞くことはまだ難しいので、返事をする話型を使って習慣化を図る。 ▼隙間時間などに、30以上の数や5とびでの数のカウントを繰り返し取り組ませていく。 ●作文や日記など、楽しんで書くことができる場面を用意し、引き続き書くことに抵抗感をもちたせないように指導する。 ▼言葉として正しく表記できるよう、学習の始めや家庭学習などで、継続的に練習し習得できるようにする。 ●ドリルパークやワークシートで適応問題に定期的に取り組み、更に定着を図れるようにする。 ▼日頃から多くの言葉に触れられるよう、言語環境を整える。問題文を初めから最後まで読むように声掛けする。

【第3学年】

<国語>

○漢字を正しく書く力が高まった。

▽修飾語、国語辞典の使い方、漢字の音訓など言語事項の理解が不十分である。

<算数>

○習熟度別学習や学習指導支援員の効果的な活用により個に応じた指導が実施でき、学習内容の理解を深めさせることができた。

▽かけ算九九の定着と、コンパスの操作の習熟に課題が残る児童が多い。

【第4学年】

<国語・算数>

○漢字、計算についてはドリル学習、デジタルドリルの学習を取り入れ、日々の授業と家庭学習の両方で習熟に取り組むことにより、基礎基本が定着してきた。

<国語>

○学習内容に応じた学習シートやスライド資料を活用することにより、読むことや書くことに苦手意識のある児童もすすんで取り組むことができた。

<算数>

○算数については、児童の実態に応じた授業形態を検討し、互いに集中して取り組める習熟度の環境を整えることで、落ち着いて意欲的に学習に取り組める児童が増えた。

▽児童の特性や実態から、様々な形態の授業を取り入れることが難しく、学び合いという点では十分に行えず、学習への満足度を高められなかった単元もある。

【第5学年】

<国語>

○段落（はじめ・なか・終わり）を意識し、文章の構成を考えて作文できる児童が増えた。

▽漢字の書き取りでは、書き順や字形、バランスに対する意識に差がある。

▽書く力、読む力の習熟度に大きな差がある。

▼辞書引き学習を継続的に行う。

▼かけ算九九の定着に向けた反復練習が必要である。

▼コンパスの扱い方を習熟させるため、使う機会を増やす必要がある。

●児童の実態に応じて、グループや学級全体の話し合い、学び合い活動など、様々な形態の学習を取り入れていくようにする。

●第二期のICT端末導入に合わせて、デジタルドリル活用の計画を見直す。

▼中学年での教科担任制実施に向けて児童の実態や配慮事項を共有し、話し合い活動やグループ活動を行う際の進め方や事前指導について入念に検討するなど、授業作りを丁寧に行っていく必要がある。

●長い文章でも構成を意識させて読ませたり、文章を要約したりさせる。

▼漢字の書き順や字形を意識させ、漢字を使用する場面を増やしたり、小テスト等を実施したりして、漢字学習に対する意識を高めさせる。

▼授業記録をとり、一人ひとりの学力の実態を把握し、指導に生かす。

＜算数＞

○数直線や図、イラスト、表などを使いながら自力解決する方法を考える力が付いた。

○習熟度別学習により、支援が必要な児童に対して個に応じた指導ができた。それにより、学力の定着が見られた。

▽解決できない問題があったとき、既習事項を生かして解こうとする児童が少ない。

【第6学年】

＜国語＞

○教師が複数の文章を対比したり、関連付けたり、思考ツールを活用して授業を組み立てたことで、学力調査の下位三割の児童が、自分の考えに対して叙述を根拠に説明したり、考えを深めたりできるようになった。

▽文字数が指定された課題に苦手意識をもつ児童が多い。取り組む機会が少なく、学期に一回以上、文字数指定の課題を設定するように学年内で検討する必要がある。

＜算数＞

○わり算や分数の計算方法、図形の作図、特徴の理解について授業導入時に振り返りを行い、終末には学んだことを生かした類似問題に取り組ませた。また、学年末にはデジタルドリルを積極的に活用し、学びの定着を図ったことで、特に定着に課題のある児童に成果が見られた。

【音楽科】

○互いの声や音をよく聴き、合わせようとする態度が育った。音楽的な見方・考え方を働かせた主体的な学びや、対話を通して学びを広げ、深めるような協働的な学びが実現できた。

▽思いや意図をもって表現するための、基礎的な技能に個人差がある。

▼既習事項を常に意識して自力解決をするよう促す。

▼自力解決の際、ヒントカードや個別対応をするなどして、分からないときに既習事項を生かして考えていく過程を改めて学ばせる。

▼文章を書く機会を、年間を通して意図的に配置、設定する。その際、文字数や使うべき表現、段落構成などを指定した課題を出すようにする。

●第二期のICT端末導入に合わせて、デジタルドリル活用の計画を見直す。

●学習の振り返りを継続的にを行い、自ら課題を見つけ、次の学習につなげられるようにする。学んだことを生かし、つなげる深い学びの実現を目指す。

▽常時活動を設定し、継続して技能を高めていけるようにする。

【図工】

○展覧会や美術鑑賞教室、校内展示を通してお互いの作品のよさに気づき、様々な材料や用具を扱う経験を積み重ねることで、創り出す喜びを味わいながら、造形的なよさや面白さ、表したいこと、表し方等について、考えて活動しようとする態度を養うことができた。

▽主体的に表現したり鑑賞したりする活動に対する意欲に個人差がある。

●次年度も校内展示などの環境を整備して鑑賞の機会を確保していくことで、造形的な視点を養っていく。

▼個に応じた指導を工夫し、自分の見方や感じ方を大切にしながら造形活動に取り組めるように支援する。